いなほ

令　和　３　年　６　月　７　日
令和３年度学校だより NO.10
加古川市立平荘小学校

児童会が「はるかのひまわりプロジェクト」を開始しました

５月２４日号でお知らせした「はるかのひまわり」について、児童会は計画をどんどん実行しています。コロナ禍であってもできる、平荘っ子の心を育てる活動を考え、実践しています。

今年度の児童会のテーマは、『命をつなぎ　心もつなぐ　笑顔広がる　愛ある平荘小』です。そのテーマの達成に向けての取り組みの一つとして、「はるかのひまわり」を全校生で育てます。プロジェクトの目的は、「命の尊さを知ること」と「つながること」です。

先週の木曜日の朝に、児童会が、各クラスをまわって、「はるかのひまわりプロジェクト」の説明を行いました。どの学年の児童も、児童会の説明を真剣に聞いていました。そして、クラスの代表者が、「はるかのひまわり」の種と「はるかのひまわりプロジェクト」のポスターを児童会から受け取りました。いよいよ活動開始です。

≪絵本「はるかのひまわり」のあらすじ≫より

阪神・淡路大震災で、妹を亡くした少女の１０年を描いたノンフィクション絵本。加藤いつかさんは、阪神・淡路大震災で妹のはるかちゃんを亡くしました。体育館での避難生活、次第に生きる意欲を失い壊れかけそうになる家族…、厳しい体験が続きました。その一方で、ボランティアの温かさにも触れることができました。震災のあった年の夏に、はるかちゃんの亡くなった場所に大輪のひまわりの花が咲きました。近所の人（うどんやのおっちゃん）が、「はるかちゃんのひまわり」と呼んだことから、毎年そのひまわりの種を蒔く活動が広がり、いつの間にか震災自体のイメージの花として、ひまわりが注目されるようになりました。当初いつかさん（はるかちゃんの姉）は、辛すぎてひまわりを見ることすらできませんでした。何年も何年も妹の名がついたひまわりを蒔き続ける活動が続く中、いつかさんも「自分もできることから始めよう」という気持ちが芽生え、立ち上がりました。

はるかのひまわり

人々に勇気と希望を与える花―はるかのひまわり―
阪神・淡路大震災　家族「再生」の物語

阪神淡路大震災

今から26年前の平成7年（1995年）1月17日午前5時46分発生
震災が奪ったもの・・・命、仕事、団らん、街並み、思い出・・・
たった1秒先が予知できない人間の限界

「はるかのひまわり」の由来

平成７年１月１７日の明け方、５時４６分、大きな地震が襲いました。木造の建物は、その揺れでひとたまりもなく崩れてしまい、２階部分が崩れ落ち、１階は完全に押しつぶされていました。

はるかちゃんがガレキの下から発見されたのは、地震発生から７時間後でした。

震災から半年後、かつてはるかちゃんの家があった空き地、はるかちゃんが亡くなった場所。驚いたことに、そこに無数のひまわりの花が、力強く、太陽に向かって咲いていました。お母さんはひまわりを見て、「娘がひまわりとなって帰ってきた」と涙しました。近所の人たちは、この花をこう呼びました。

『はるかのひまわり』

何も無くなってしまった町の空に、次々に咲いた大輪の花はたくさんの人を励まし勇気付けました。

≪「はるかのひまわり絆プロジェクト」より≫

今、平荘っ子は、「はるかのひまわり」の種を植えたところです。全校生で育てます。夏にはきっと太陽に向かって力強く咲いている「はるかのひまわり」に出会えることでしょう。楽しみですね。

将棋教室がありました（３・４年生）

６月２日（水）に、３・４年生を対象に、プロ棋士の井上慶太９段が、将棋を教えてくださいました。初めて将棋に出会う児童もいる中、将棋のルールをわかりやすく説明してくださいました。最初、子どもたちは、井上棋士の場面設定の中、どう攻めれば自分が勝てるかを考えていきました。相手がどう出るかを想定しながら攻めていく将棋に、子どもたちは夢中になりました。最後は、「歩」を抜いた状態で、友だちと将棋にチャレンジしました。次回、６月２２日（火）に、再度井上棋士に将棋を教えていただけます。